



TITLE:

野生ニホンザル集団における個体の空間的布置構造の研究(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

増井, 憲一

CITATION:

増井, 憲一. 野生ニホンザル集団における個体の空間的布置構造の研究 (Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1979, 8: 35-35

ISSUE DATE:

1979-01-13

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162821>

RIGHT:

2. 研究成果

設定課題 1. 群れの統合機構に関する研究

野生ニホンザル集団における個体の空間的布置構造の研究

増井 憲一（京大・理）

積雪期の白山北麓尾瀬川蛇谷流域（石川県石川郡吉野谷村・尾口村）においては、天候に恵まれれば、巾数百メートルの溪谷を隔てて、雪におおわれた対岸の斜面に遊動する野生ニホンザルの集団を眺望することができる。われわれはこの観察条件のもとに、上記表題の資料を得るための調査を実施している。

集団における個体の布置構造の問題は、個体群の分布論の延長上にあるものとして、言いかえれば、生物の集合状態を現象的なレベルでいかに表現、記述するかという純粹に生物統計学的課題として位置づけられるとともに、集団の持つ機能の理解といった生態学的または生物社会学的課題としても位置づけられるだろう。こういった方向の試みはカーペンターの著作の中にも見られ、彼は集団内の個体間距離の和による種間の社会組織の比較を提案したこともある。しかし、実際上は、集団の広がりや移動の状況を8mm映画に撮影することも試みている。また、1977年度には、蛇谷流域で餌付けられている集団（カムリA群）の餌場における広がりの調査を行った。

われわれは調査方法として、主に、集団のほぼ全体が見渡せる位置から、一定時間ごとに、集団が広がっている範囲をスケッチし、それに個体の位置と活動状態を記入するという手法を用いているが、1975年からは、集団の広がりや移動の状態を8mm映画に撮影することも試みている。また、1977年度には、蛇谷流域で餌付けられている集団（カムリA群）の餌場における広がりの調査を行った。

資料の量、質ともにまだ十分とはいえないが、集団の広がりや個体の布置様式のタイプ分けを、集団の活動状態（採食、移動、休息、先行する活動状態、野犬や他集団の接近による緊張状態、など）と、環境条件（地形、渡渉、トラバース、積雪深、植生、ナダレ跡の形状、天候、など）の二つの軸について試みている。布置構造を定量的に示すについては残された課題が多い。また、照葉樹林における同様な調査はより重要と思われる。

定性的ないくつかの点について触れておこう。これまでの観察を通じて、われわれは遊動を先導する特定の個体は認められないという考えに傾いている。また、どのようなタイプの布置状態においても、アカンボウ（のグ

ループ）が中心的な位置にみられることが多い。緊張状態で生じる凝集の核はオトナオスであることが確認された観察例が得られている。これらのことやその他の観察の経験からわれわれは、ニホンザルの集団は、平常は特定の個体を集中の核としていることはなく、集団の活動リズムと周囲の状況にそれぞれの個体が経験にもとずいて同調することによって成りたっているという印象をいだいている。

箱根のニホンザルの社会生態学的・比較行動学的研究

福田 史夫（マカク研）

田中 進（〃）

村松 正敏（〃）

増井 博明（日本林業技術協会）

J. J. Burton（京大・霊長研）

赤堀 克正（真鶴小学校）

本年度の研究は 1) T 群の subgrouping 構造の解明、2) 個体の群間移動機構の分析、3) 餌場における T 群の行動解析、4) 植生図作製を目的におこなわれた。

しかし、52年6月；H 群4頭の射殺、9月；T 群2頭（1頭はボス）の射殺、10月；湯河原全域に生息する20頭の射殺許可、以後53年4月；R₁ 群10頭の捕獲、5月；H 群20頭の捕獲許可等、研究そのものが続行不可能な状況になってきている。

箱根は全国でも数少ない長期にわたって複数群の個体識別がなされているフィールドである。このような地域で、ニホンザルの野外研究が妨害されることは、ニホンザルの野外研究にとっての大きな損失である。現在、全国各地で、箱根と類似した研究対象そのものが失なわれていく政策が施行されている。霊長類の研究を推進する上にも、日本各地のサルを絶滅の危機から守らなければならない。特定地域の特定個体群の保護は、ニホンザルという種のもつ『多様な面』を無視するものである。また、安易な関引論を考えている研究者には猛省を促す。我国に霊長類研究所が設立されているのにもかかわらず、我国固有の霊長類が日毎に絶滅していく状況を早急に打破していかなければ、ニホンザルの野外研究は背語りになってしまうのも遠い日のことではない。